

通譯には二種類あり。ひとつは逐次通譯にて、話さるる言葉を特定の長さに切り、それをメモに基き通譯す。もうひとつは、所謂ブースと言はるる箱のごとき「部屋」に二人づつ入り、マイクに向かひ言葉をドンドン通譯して行く。出席者はイヤホンにて聞く。何箇國語も話さるる場合は基軸言語を英語にし、佛語、西語はまづは英語にす。それを英語より他の言語に通譯す。

また、通譯者も英語に強きか、日本語に強きかに分かる。日本語は文章の末尾まで聞かずば、否定なりや肯定なりや分別に難澁す。四十年前までは通譯者と呼ばるる職業の人材は日本には殆ど存在せざりき。政府内にも通譯専門家はをらず、中央省廳の若き官僚たちこれに任じたりき。その當時ブースや機材等も存在せず、逐次通譯趨勢なりき。國際會議場も外務省内のものど京都の國際會議場のみなりきとぞ記憶せる。

國際通貨基金・世界銀行總會などに出席する大藏大臣は、通譯者なきによりて、會議や挨拶等は力なを振りし英文原稿を讀みたりき。今や笑ひ話なるが、その演説を聞きし英米人たち「日本語は英語に似たり」と言ひたりき。

高度成長遂げたる日本も、國內にて國際會議開催せらるるに至り、同時通譯者増加するあり。されど、超一流の通譯者は十指に満たず。今日なほ變るなきにあらずやと憂慮せらるる。

若かりし頃、一度必要に迫られ、ブースに入りて同時通譯をしたりき。吾は當時より日本語に比べ英語に強し。邦譯の言葉一瞬思ひ浮かばずとそこにて詰まりたるに、先へ進むこと難く、言葉瞬時に出でて來ぬ場合はカタナカのままにて話せと指示されき。ただただ、話されし言葉英語もしくは日本語にするのみなり。腦みそ空っぽなる状態にして次々と「變換」して行けば、會議終はりし時には内容記憶に残らず。逐次の場合は完全に記憶したり。

ある環境會議のレセプションに於て、配置せられし通譯者下手にて、突然通譯者ならぬ吾代役する羽目になりき。大臣の挨拶はアダム・スミスの見えざる手より始まり、何を話さむとするやも分からず。仕方なければ、要約して英文にしき。眞正面に英語流暢なる人物立ちて、嫌な豫感すれど役割完遂しき。終りたれば、その人物「君の英語の方がよほど分かり易かりき」と嫌味を言はれ、苦笑せし覺えあり。

(平成二十九年一月二十日受附)